

ジョン・ロックの貨幣論 續

— 一六九五年の改鑄論争におけるロックの立場 —

種 瀬 茂

一六八九年のいわゆる名譽革命 Glorious Revolution によってイングランド England には新しい時代が開かれた。立憲議會制の確立のもとに權利宣言・議會による課稅權の確保等により今やウィリアムとメアリ William and Mary の王權は議會の統轄のもとにおかれたし、寛

容令と出版の自由に對する制限の廢止とは、宗教・思想の分野における民主制の開始を告げた。ここに一七世紀はじめ以來たかわれてきた王權と議會・人民との對立抗争が一つの集約した成果を見出したのである。と同時にそれは出發點でもあつた。民主制の深い實質的内容はまさにこれから強力に築かるべきものであつた。そして

まず政治的にはトーリ・ウィッグ兩黨 Tories, Whigs の對立の中で議會政治および内閣制度の運営が行われ、經濟的には議會による重商主義體制 Parliamentary Cobdenism が進められた。これと深い關連をもつて對外的にはフランス France との戦争が遂行されていったのである。こうしてイングランドは一八世紀後半にはじまる産業革命 Industrial Revolution を準備した。

さて新しい資本制生産が開始され展開されるに當つては通貨體制の安定は缺くべからざるものであろう。しかるに名譽革命に當つてのイングランドの通貨は非常に混亂したものであつた。すなわち hammered money とよばれる舊銀貨はその量目の半分にいたる程の削損 clipped money を受け、さらに偽造が横行し、そのため milled mo-

neyとよばれる新銀貨は退藏されたり鑄つゞして海外に流出されたりして、流通の過程には見られなくなっていた。この状況はすでに人々によって注目されその対策が論ぜられていたが、ジョン・ロック Locke, John 1632—1704 もまた、親友であるウィッグ黨主腦の一人サマズ卿 Lord John Somers or Sommers 1651—1716 のもとめにより、その見解を發表した。これが、

Some considerations of the consequences of lowering the interest, and raising the value of money. London 1692.

という論文の後半の部分、すなわち、"Of raising our coin"と題せられた論文であった。

議會もすでに名譽革命の直後からこの問題を取り上げ対策を論じてきたのであるが、全面的改鑄にまでいたらないままに一六九四年をむかえた。ところが同年五月、イングランド銀行 the Bank of England の設立という新しい要素が加わり、事態は新しい様相を呈することとなった。

私はさきに執筆した⁽¹⁾一論においてロックの右の論文を

ジョン・ロックの貨幣論 續

當時の状況の中で觀察し、かれの對策とその基礎となっているかれの貨幣理論を學んだ。そこで一六九四年以後右のごとき新要素を加えた状況の中で、ロックはいかに對處していったであろうか、を學ぶのが本稿の主題である。

(1) 拙稿『ジョン・ロックの貨幣論——"Of raising our coin." (1692) を中心として——』一橋大學經濟學部研究年報『經濟學研究』(刊行豫定) 所收。

二

イングランド銀行設立の最も直接的な効果はウィリアム三世政府の財政救済であった。すなわち議會による年の對フランス戦費は巨額ではあったが、戦争遂行には不十分であり、課税權は議會の統轄下であつて外來の王ウィリアムにとってはその財政を獨斷で擴充できなくなっている。しかるにイングランド銀行設立とともにその資金一二〇萬ポンドが政府に貸し付けられ、長期公債制度がここに確立されることとなった。⁽¹⁾政府はこの資金をもつて裝備を整え、一六九五年ウィリアムは自らフラ

ンダズ Flanders) に出兵して、對フランス戰を勝利にみちびくことができた。陸戦において勝利への轉機となつたナミユル Namur の奪回(一六九五)は、まさにイングラント銀行がもたらしたとさえいわれてゐる。⁽²⁾

(1) 長谷田泰三『英國財政史研究』一九五一年、三六ページ。

(2) Clark, G. N.: The later Stuarts 1660—1740. Oxford [1934] reprinted 1949. p. 171.

このような直接的効果の外に、銀行はいくたの深刻な影響を與えた。⁽³⁾ここでは當面の通貨狀況に關連してその銀行券の發行について考察しよう。というのははその發券によるインフレーションの狀況こそ直接に一六九六年からの大改鑄をみちびき出すことになつたからである。

(3) Lipson, E.: The economic history of England. Vol. III. London [1931] 5th edition 1948. p. 241—3. 長谷田、前掲書、二七八—二八〇ページ。

(4) 勿論設立當時發行された紙幣は、國家による強制通用力をもたず利子付き債券として裏書き譲渡されて流通したものである。しかしそれは納税に當てることができ、一般に信用も高く、將來の銀行券の芽ともいふべきものであつた。ここではまずそれが鑄貨の價值章標としての作用を體

現するものとして考察し、最終節においてその信用通貨としての作用にふれることとする。

イングラント銀行はその資金二二〇萬ポンドのうち、現金として即時拂い込まれた七二萬ポンドはその現金のまま、残り四八萬ポンドは捺印手形 Sealed Bank Bill をもつて政府に貸し付けた。さらに同一六九四年末から翌年はじめにかけて、政府財政救済のために割符 Tallies の買入れを多量に行ひ、これに對して現金切手 Running Cash Note を發行した。議會に提出された一六九六年一月一日付けの銀行の貸借對照表によれば、前者は約八九萬ポンド、後者は七六萬ポンドに達している。⁽⁵⁾このような大量の發券は明らかにインフレーションの方策であつた。『かくして王の直面せる諸困難は最も單純なインフレーションによつて克服されたのである。』⁽⁶⁾

(5) Feaveyear, A. E.: The Pound Sterling, a history of English money. Oxford pp. 116—118, 133.

長谷田、前掲書、七一—七二ページ。

(6) Feaveyear, A. E.: ibid., p. 117, 119.

さて當時の鑄貨はさきにふれたごとく、流通する ha-

numbered money は非常な削損をうけ、しかも偽造多く、正規量目の縁刻貨幣 milled money は退蔵・鑄つぶしに よって流通してゐなうとらうひどう状況であつた。それ に加えてここに新しく多額の銀行券の發行によるインフレーション。その結果は金に對する高まる評價による金の流入と銀の流出であり、これによって鑄貨の削損・鑄つぶしはますます激化し、市場の混亂が増大する。物價は急騰して一般人民の生活の困難はまし、租税・貸付金・歳入における損失は大となる。⁽⁷⁾

(7) Lowndes, William: A report containing an Essay for the amendment of the silver coins. London 1695. in "Old and scarce tracts on money, with a preface by J. R. McCulloch. London 1933. pp. 169—258." pp. 230—4.

一般物價はこの銀行券發行につれて急騰した。金・銀地金およびかわせ料についても同様の騰貴が見られる。⁽⁸⁾

(8) Feaveyear: op. cit., pp. 119—120. cf. Ruding. R.: Annals of the coinage of Britain and its dependencies, etc. Vol. II. London 1817. pp. 384—6. Rogers Thorold: A history of agriculture and prices in Eng-

モン・ロッキの貨幣論 續

land etc. Vol. V. 1583—1702. Oxford 1887. pp. 471—3.

今、銀地金の價格を見よう。それは オンスにつき、一七世紀の大半を通じて五シリング二ペンスなりし四ペンス。

一六九四年	五月	五シリング四ペンス
	十一月	五シリング五ペンス
一六九五年	三月	五シリング九ペンス
	九月	六シリング五ペンス

金については、一六九五年二月、金貨ギニ Guineas の市場相場は二一シリング臺から一きよ二五シリングに暴騰し、さらに六月には三〇シリングとなつた。

議會は大藏大臣 the Chancellor of the Exchequer モンタギュー Montague, Charles 1661—1715——かれもまたロッキの友人であつた——の要請により、一六九五年一月八日再び委員會をもうけて通貨對策を検討したが、その報告 Mr. Scobel's report ⁽⁹⁾ が三月二日に提出された。討議の中心となつてゐた點は、改鑄後の新鑄貨は従來の規準をもつてすべきか、あるいはその名目を引

き上げるべきか、にあった。これについて同報告は名目の引き上げを主張している。すなわち従来一クラウンが五シリングニペンスであったが、これを五シリング六ペンスにしようとするのである。この主張はすでに名譽革命直後から提出されており、ロックの見解と密接な関連のもとに、あったウィッグ黨政府の受け入れ難いところであった。⁽¹⁰⁾ はたしてこの委員会報告も討議に付されたままにぎりつぶされ立法化されるにいたらなかった。これは名目引き上げを主張するトーリ黨と従來の規準の保持を主張するウィッグ黨との政治的對立として發現し、大蔵大臣モンタギューはわずかの差をもって自らの見解を通すことができたといわれている。⁽¹¹⁾

(6) Cobbet's Parliamentary history of England. Vol. V. [1688—1702]. London 1809. pp. 955—6.

(10) 拙稿、前掲、第三・六節。

(11) Liverpool, Charles 1st Earl of: A treatise on the coins of the realm; in a letter to the King. London 1880. p. 82. Ruding, R.: op. cit., pp. 388—9.

このような對立の中で、改鑄實施は決定にいたらぬままさらに遷延されていた。しかし一六九五年五月にお

けるさきに見たとき金價格の暴騰は政府の深い注目をひき、實踐を迫った。⁽¹²⁾ 議會は貨幣當局のエクスパートたる大蔵省委員 Secretary of Treasury ラウンズ Lowndes, William 1652—1724 に、狀況と對策の検討を命じた。

(12) Feaveyear: op. cit., p. 121.

ラウンズの報告は同年九月一二日付けをもって提出され、これをめぐってロックとの論争が展開されるにいたる。今その内容に入るに先立って、以上までに見た當時の通貨狀況について、それを理論的にまとめてみよう。そうすることによって、論争當事者の各々の觀點が一そう明確にできるのではないかと思うからである。

三

今一國內に一〇〇〇價值の商品 commodity が流通し、同時に流通する貨幣は銀とする。ここでは對外かわせ關係および金融信用の作用は捨象して考察する。

(一) 一國內に貨幣たりうる銀地金 silver bullion が一〇〇〇價值だけあり、これが鑄貨 coin にされれば、

1000 commodity = 1000 bullion = 1000 coin

1 commodity = 1 bullion = 1 coin

1 圓 = 1 coin = 1 圓 = 1 bullion = 1 coin = 1 圓

1 commodity = 1 bullion = 1 coin = 1 圓

となる。

(一) 今右の鑄貨が全部削損 clipping をうけてその重量の半分を失ったとする。

2 clipped coin = 1 coin = 1 bullion

= 1 commodity = 2 圓

1 clipped coin = $\frac{1}{2}$ coin = $\frac{1}{2}$ bullion

= $\frac{1}{2}$ commodity

削損貨幣もその名目におうては一圓であるから、今や bullion も commodity も削損に比例して二倍の一圓となるであろう。

(三) 次は地金または鑄貨が、種々の理由によって、海外に流出して不足し 800 coin となったとしよう。そのときには、800 coin が一國內の流通過程にあって 1000 bullion の役割りを演じなければならなくなる。す

ジョン・ロックの貨幣論 續

なわが

1000 bullion = 800 coin

1 coin = $\frac{4}{5}$ bullion

とさう関連のもとで、coin は流通する。かくして、次のこととなる。

1000 commodity = 800 coin

1 commodity = $\frac{4}{5}$ coin = 80 錢

1 coin = $\frac{5}{4}$ commodity

すなわち(一)と同一の commodity の価格は、名目からいえば貨幣不足のゆえに八〇錢と下落してくるのである。しかしここで注意すべきは bullion と coin の關係である。今鑄造費用が國庫負擔とすれば、1 bullion の所有者はそれを造幣局にもつて行きそれと引き換えに 1 coin をうることができる。すなわち 1 bullion = 1 coin として自由に轉換できるのである。それゆえ、前に見たごとく、1 coin は流通過程の内部においては $\frac{5}{4}$ bullion の價値を章標して運動するのであるが、それからただち

に 1 bullion が $\frac{4}{5}$ coin = 80 錢と交換されるわけでは
なす。この段階では bullion と coin との區別は、まだ
生じなすのである。

- (一) 銀の海外への流出には次のような原因があげられる。
海外での戦費の支出・對外貿易の逆調。さらに金・銀比價
について金が高く評價され、金の流入と銀の流出をまねい
たと見られている。山上午一『一六九六年の貨幣改鑄』
(大分高商商學研究會『商學論集』第七卷第二號、一九三
五(昭八)年、所收)第三・四節、参照。

(四) 左の右の 800 coin の場合

700 coin.....hammered money

100 coin.....milled money

としよう。そしてこのうち milled money は退蔵されて
しまふ、流通してゐるのは 700 coin の hammered mo-
ney だけとなつたとしよう。このときは通貨は一そう
不足し、物價はさらに下落するであらう。すなわちこの
では coin は

1000 bullion = 700 coin

1 coin = $\frac{10}{7}$ bullion

としての役割を流通過程中ではたす。かくして、

1000 commodity = 700 coin

1 commodity = $\frac{7}{10}$ coin = 70 錢

1 coin = $\frac{10}{7}$ commodity

commodity の價格は今や七〇錢となる。このでも
bullion と coin との區別が生じなすことは(三)と同
様である。

(五) ここで次に右の状況の中で削損が行われ、700
coin (hammered money) はその重量の半分を失つたも
のとよぶ。その重量からみれば

2 clipped coin = 1 coin = 1 bullion

であるけれども、實はこの coin は(四)の場合に見る
ごとく 700 coin (hammered money) であつて、それ
は貨幣不足のために、まさに 1000 bullion の役割を流
通過程におして演じてゐる。すなわちこの 700 coin
は、

1000 commodity = 1000 bullion = 700 coin

として流通してゐるのである。今、

2 clipped coin = 1 coin
 なのであるから、それゆゑ、

$$1 \text{ commodity} = 1 \text{ bullion} = \frac{7}{10} \text{ coin} = \frac{7}{5} \text{ clipped}$$

$$\text{coin} = 1 \text{ 圓 } 40 \text{ 錢}$$

となるであらう。

何ら削損をうけていない状況のもとにおきては、(三) (四)のごとく bullion と coin との區別は生じなご。しかるに削損貨幣が流通するようになると、ここではじめて兩者の區別が生ずる。bullion と clipped coin とはその重量を基として相互に比較されることとなるであらう。すなわち(二)の場合のごとくである⁽²⁾。

(2) Marx, K.: Zur Kritik der politischen Ökonomie Erstes Heft. Volksausgabe. Besorgt vom Marx-Engels-Lenin-Institut. Moskau 1934, s. 66, 邦譯『經濟學批判』(『マルクス・エンゲルス選集』補卷3)一九五一年、七八—九ページ、參照。

ところでこの(五)においては状況はさらに複雑である。(二)のように coin が流通に過不足ないときには、削損の程度はそのまま物價に表現される。すなわち、

ジョン・ロットの貨幣論 續

1 commodity = 1 bullion = 2 clipped coin = 2 圓
 であつた。しかるに(五)のごとく貨幣不足となり 700 coin が流通してゐる状況の中で削損が行われると、

$$1 \text{ commodity} = 1 \text{ bullion} = \frac{7}{5} \text{ clipped coin}$$

$$= 1 \text{ 圓 } 40 \text{ 錢}$$

となる。ここではその削損による物價騰貴の程度は、非常に緩和されて表現されることなるのである。そして bullion もまたその重量における削損貨幣との比價によらず、より緩和された程度で、(二)のごとくより少く clipped coin と交換されることなるのである⁽³⁾。

(3) Marx, K.: op. cit., s. 112—3, 邦譯『一三四—五ページ、參照。

一六九四年にイングランド銀行が設立されるまでの貨幣流通の状況は、ちようど(五)の場合に當るであらう。激しい削損や偽造によって鑄貨中の銀はその量目の半ばに達する程失われてしまつていたにもかかわらず、一般物價や地金の價格はそれ程騰貴を示さなかつた。それゆゑ一般に事態はさし迫つたものとして受け取られることなく、ただちに削損貨幣の全面的改鑄にまでいたること

がでなかつた一つの理由がここに存したといえるであらう。⁽⁴⁾

(4) Feavearyear: op. cit., p. 112. 拙稿、前掲、第三六節。

さて次に紙幣 paper の發行される場合を考察しよう。ここで紙幣とは鑄貨として機能する價值章標を意味する。⁽⁵⁾

(5) Marx, K.: op. cit., s. 107. 邦譯、一二ヶページ、参照。

(六) 今(三)の場合、すなわち 800 coin が流通してゐる場合に、100 paper = 100 圓が 100 coin の價值章標として發行されたとき、今や流通過程には、

$$800 \text{ coin} + 100 \text{ paper} = 900 \text{ coin}$$

があり、これが 1000 bullion に相當する役割を演じてゐる。かくして、

$$\begin{aligned} 900 \text{ coin} &= 1000 \text{ bullion} = 1000 \text{ commodity} \\ \text{paper} & \\ 1 \text{ coin} &= \frac{10}{9} \text{ bullion} = \frac{10}{9} \text{ commodity} \\ 1 \text{ paper} &= \frac{10}{9} \text{ bullion} = \frac{10}{9} \text{ commodity} \\ 1 \text{ commodity} &= 1 \text{ bullion} = \frac{9}{10} \text{ coin} = 90 \text{ 錢} \end{aligned}$$

このようにして paper の發行は物價騰貴を生ぜしめるであらう。すなわち、

$$(三) \text{ では } 1 \text{ commodity} = \frac{4}{5} \text{ coin} = 80 \text{ 錢}$$

$$(六) \text{ では } 1 \text{ commodity} = \frac{9}{10} \text{ coin} = 90 \text{ 錢}$$

となつてゐる。注目すべきは、(六)の場合では paper と bullion との區別が生じ、1 bullion = $\frac{9}{10}$ paper (= 90 錢) となるのである。

(七) 次にさらに貨幣不足となつた(四)のときに 100 paper = 100 圓が發行せられたとき、このときは(六)と同様にして、

$$\begin{aligned} 700 \text{ coin (hammered money)} + 100 \text{ paper} \\ = 800 \text{ coin} \\ \text{paper} \end{aligned}$$

が流通してゐる。かくして、

$$\begin{aligned} 1 \text{ coin} &= \frac{5}{4} \text{ bullion} = \frac{5}{4} \text{ commodity} \\ \text{paper} & \\ 1 \text{ commodity} &= 1 \text{ bullion} = \frac{4}{5} \text{ coin} = 80 \text{ 錢} \end{aligned}$$

となる。(四)と(七)とを比べると、paper 發行は

ともなう物價騰貴は明らかである。

(八) 次に(七)の状況の中で 700 coin (hammered money)の重量の半分が削損により失われたとしよう。
このときには、

$$2 \text{ clipped coin} = 1 \text{ coin} = \frac{5}{4} \text{ bullion}$$

$$1 \text{ bullion} = \frac{8}{5} \text{ clipped coin} = 1 \text{ 圓 } 60 \text{ 錢}$$

$$1 \text{ commodity} = \frac{8}{5} \text{ clipped coin} = 1 \text{ 圓 } 60 \text{ 錢}$$

$$1 \text{ clipped coin} = \frac{5}{8} \text{ commodity}$$

(七)の場合とくらべてみると、物價騰貴は削損により一そう激しく表現されることになるのである。この場合 paper は流通貨幣すなわち clipped coin の價值を章標するものとして作用し、その結果、

$$1 \text{ paper} = 1 \text{ clipped coin} = \frac{5}{8} \text{ bullion} =$$

$$\frac{5}{8} \text{ commodity}$$

となるのである。今や 1 bullion は $\frac{8}{5}$ clipped coin、1 paper = 1 圓 60 錢

シモン・ロックスの貨幣論 續

として交換されることになるのである。

さてこの(八)とさきの(五)とをくらべてみよう。削損貨幣の流通する中で紙幣が発行されれば物價の騰貴は一そう明白にあらわれてくる。すなわち、削損と發券とが二つの要因が重って作用してくるからである。

$$(五) \text{ では } 1 \text{ bullion} = 1 \text{ commodity} =$$

$$\frac{7}{5} \text{ clipped coin} = 1 \text{ 圓 } 40 \text{ 錢}$$

$$(八) \text{ では } 1 \text{ bullion} = 1 \text{ commodity} = \frac{8}{5} \text{ clipped}$$

$$\text{coin} = \frac{8}{5} \text{ paper} = 1 \text{ 圓 } 60 \text{ 錢}$$

となる。さきにも述べたようにイングランド銀行券の發行がただちにいちぢるしい物價騰貴をもたらしたという事情は、まさにこの(八)の状況が生ぜしめられたことを意味する。以上によって當時の通貨狀況の理論的内容を理解できるのではなからうか。

このような(八)の状況が生み出された一六九五年なかばには、事態はもはや全面的改鑄の遷延をゆるさないう程切迫したものとなった。前述のごとく議會の要請によ

つて事態の検討をすすめたラウンズは、一六九五年九月一二日付けをもちつて次の報告を提出した。

A report containing an Essay for the amendment of the silver coins. London 1695. in "Old and scarce tracts of money, with a preface by J. R. McCulloch. London 1933." pp. 169—258.

ラウンズは、同年十月に

Short observations on a printed paper, entitled, For encouraging the coining silver money in England, and after for keeping it here in "The works of John Locke, 12th edition. Vol. 4. London 1824." pp. 117—130.

と題する一小論を書き、さらに再びサマズ卿のもとに應じ、ラウンズの論文を詳細に批判する一文を發表した。すなわち、

Further considerations raising the value of money. Wherein Mr. Lowndes's arguments for it, in his late Report containing an "Essay for the amendment of the silver coins," are particularly exa-

mined. London 1695. in "The Works of John Locke, 12th edition. Vol. 4. London 1824." pp. 131—206.

(2)

である。

(3) 以下ラウンズとロックからの引用に示したページ数は、右兩書のページ数である。

削損貨幣改鑄問題について利害の對立と激しい論議が行われてゐる中で、この兩論文はそれぞれ對立する立場を最もよく代表するものとなつた。その議論の關連する範圍は廣くその内容は詳細であるが、ここではその基本點を要約し、この兩者がいかに當時の状況を把握したか、いかなる對策を提出したか、さらにそれはいかなる貨幣觀にもとづくものであらうか、以上の諸點を考察しようと思ふ。

四

ラウンズは當時の地金價格の騰貴を銀の不足によるものとしてゐる。『地金での標準銀の價格は(種々の必要なるものは)不必要な諸原因——それが結局イングランド

の銀地金の一大缺乏をまねいたのである——によって）一オンスにつき六シリング五ペンスにまで引き上げられている。』（二〇六ページ）という。しからはこの銀の一大缺乏は何によるのであろうか。ラウンズによれば、必要な原因とは對フランス戦のための海外での出費および競争に際しての貿易阻害による貿易差額の逆調のための銀の流出であり（二一〇ページ）、不必要な原因とは金銀比價の操作によって利得をえるための銀の輸出と金の流入である（二〇九ページ）。『このような方法によって銀は鑄貨としても地金としても實際イングランドでは非常に稀少となった』のである（二一八ページ）。ラウンズの指しているこのような状況はすなわち前節に要約した（三）の状況に當るであろう。これを（一）の状況と對比してみれば明らかに流通鑄貨の不足・物價の下落が生ずる。他方鑄貨および地金の交換價値は増加し、その同一量をもってより多くの商品を買入れうるようになる。ラウンズが銀の不足はその價格を騰貴せしめたというのはこのことを指しているであろう。すなわちかれは次のように説いている。『何らかの價値すなわち Value

or Worth をもつ物はどれでも、稀少 Scarce となれば高價 Dear となる、すなわち（同じことだが）その價格 Price が高くなる。そしてその結果それはより多くの債務を支拂うのに役立ち、また他の價値ある財のより多量を買入れるのであろう、つまり他のある物との交換にさいしてそれは以前よりもより價値多きものとして通用するであろう。銀はイングランドでは、前述のごとく、稀少となったので、その結果高價となったのである。』（二一八ページ）と。

（一）前節註（一）参照。

ラウンズは右のような銀の交換價値の増加からただちに地金と鑄貨との區別が生ずるとしている。すなわち銀が高價となったので銀地金價格が一オンスにつき五シリング二ペンス（これが當時の鑄造價格である）から六シリング五ペンスへと騰貴したのであり、日常の経験においては、一九ペニー・ウェイト一〇分の三（これが正規の一クラウン五シリング中の銀の重さ）の標準銀地金は五シリング以上の鑄貨と交換されているのである、と（二一八ページ）。かくして鑄貨鑄つゞしの原因がここに

あるとラウンズはいう。鑄貨としての銀の外的價值 *trinsic Value* が地金としての銀の價格以下であるとき
にはいつでも、鑄貨は鑄つぶされるであらう、と(二〇
六ページ)。

はたしてラウンズの説くごとく鑄貨と地金との差別は
右のようにして生じたのであらうか。當時のイングラ
下は一六六六年以來自由鑄造制のもとにあった。そこ
では鑄造費用は國庫負擔であるから地金と鑄貨はその價
値において何ら相違なく自由に同等のものとして交換さ
れるはずである(ロック、一七四ページ)。とすればすでに前
節(三)において見たごとく地金と鑄貨との間に何ら區
別はなく、鑄貨をもってしてもそれを鑄つぶした地金を
もってしても、同じ商品の同量を買いうるのであらう。そ
れゆえラウンズのように、ここにおいて地金と鑄貨の區
別が生じ、それを利用して鑄つぶしが行われると結論す
ることは、その理論的分析の道程において不十分さを免
れないであらう。

ロックの批判はまさにこの點に集中している。現在正
規の鑄貨として一オンスの地金が五シリング二ペンスと

されているときに、ラウンズのいうごとく一オンスの地
金が六シリング五ペンスの鑄貨と交換されることがあり
えようか。それは一オンスの銀が一オンス四分の一の銀
と相等しいということの意味する。このような馬鹿げた
ことを人は認めることはできないであらう、というので
ある(一五三—一五六、一七二、一七九—一八〇ページ)。しから
ばロックは當時の地金價格の騰貴と鑄つぶしをどう説明
するか。それは削損貨幣に基因するというのである(一
五七ページ)。削損貨幣によるならばその六シリング五ペ
ンスの中に一オンスの銀が含まれかくして地金一オンス
と交換されうるのであらう(一五七ページ)。すなわち削損
貨幣のために「重さにおいて不足した分をその個片の數
において償うために」(一六九ページ)價格がひき上げら
れるのである。すなわちロックは前節(五)の狀況を指
摘しているといえよう。この場合には削損貨幣と正規貨
幣・地金との差異は明らかである。地金および一般商品
の價格は騰貴するであらう。削損はますます行われ正規
重量の貨幣は退藏されるか鑄つぶされるであらう。右の
ように見れば、地金の市場價格が鑄貨の鑄造價格より騰

貴し、また一般物價が騰貴したという當時の状況の把握において、ロッキのそれが理論的分析のすじ道が通っており優れていることができるであらう。

(2) 地金と鑄貨の差別が生ずる別の一原因をロッキは示している。地金が輸出を許されているのに鑄貨が許されていないという状況では、かわせ支拂いに當てるために地金に對してより高く支拂わねばならなくなる、というのである(一一八—九、一五九—一六二ページ、一八三—四ページ)。

貨幣問題のエクスパートたるラウンズがこの點を見ずばすはない。かれはその論文の第二節および第三節において流通鑄貨の状況とそこから生ずる諸困難を詳しく記述し、まさしく削損貨幣の問題をとり上げている。そして削損は *hammered money* に對して行われ、*milled money* についてはその厚みと縁刻(ギザギザ)のために削損は行われなかった、とのべている(二二三ページ)。前者は舊式技術によりその量目が整一でないゆえに削損を受けやすく、後者は新しい機械によって鑄造され量目整一でその縁にギザギザがあり削損・偽造が困難であった(二二一—二二二ページ)。これに對して鑄つぶしは

ジョン・ロッキの貨幣論 續

主として *milled money* について行われる。それが流通せる *hammered money* つまり削損貨幣に比してより重く・價値多いがゆえである(二二四ページ)。さらにラウンズはこのような削損貨幣から生ずる諸弊害の中で一般物價の騰貴に言及している。すなわち『もし取り引きが高率のギニ金貨か削損の悪貨幣でなされるとすれば、人はそれにつれてかれらの財の價格を定めることになる。これが「諸商品の」價格引き上げの一大原因であつた。』と(二三三ページ)。さきに見たごとくラウンズは當時の状況を(三)として把えていたとすると、ここでは物價は逆に下落を見なければならぬ。しかるに事態は物價騰貴として把えられている。ロッキはラウンズのこの矛盾を指摘して、かれの(三)による把握を批判している(二六九ページ)。このことは他方ラウンズもまた削損貨幣・鑄つぶしの事態についてロッキと同じく前節(五)の状況として把えていることを示しているといえよう。しかしラウンズはこの削損貨幣がまさに地金と一般商品の價格騰貴を生ぜしめた原因とは見ず、削損貨幣と地金價格騰貴・鑄貨鑄つぶしには何らの關連も説明さ

れていない。むしろここでも銀の『價格』に注目し、鑄貨としての銀と地金としての銀とが同等に交換されるならば、鑄つぶしを免れるであろうとして、名目引き上げ主張の根據に結び付けている(二二四・二三四ページ)。ここにさきにふれたごとき理論の飛躍がふくまれているのである。

要するにラウンズは地金價格の騰貴と鑄つぶしの原因を銀の不足にもとめ、ロックはこれに對して削損貨幣にもとめた。兩者はともに(三)(四)(五)の狀況を把握しているのであるが、ラウンズは(三)にロックは(五)に自らの論據を置いているといえるであろう。

五

さてロックとラウンズは右のような狀況把握にたつて自らの對策を提示している。

まずラウンズのそれを見よう。削損貨幣の非常な弊害を知るかれは第一にその改鑄が必要であることを主張する(二三〇ページ)。すなわち(五)の狀況を(四)に引きもどさねばならぬとする。次にこの(四)においても

貨幣の不足・地金價格の騰貴は收拾できない。ラウンズはこの銀不足から地金價格騰貴を導き出しそこに鑄つぶし・退藏の原因を見ていた。それゆえ(四)の狀況をもってしてはそれらの弊害は何ら阻止しえない。かくして鑄貨名目の引き上げが必要とされることになる。それは地金と鑄貨との『價格』差を解消する。退藏されていた縁刻貨幣は今や再び流通にひきもどされる。こうして(三)の狀況が生ずるのである。さらに鑄貨名目の引き上げは次のように作用するのである。

今(三)の狀況のもとに鑄貨の名目を $\frac{1}{4}$ 引き上げ、従来1 coin \equiv 1圓と呼ばれていたものを1 coin \equiv 1圓25錢としよう。すると、

$$1000 \text{ commodity} = 800 \text{ coin} \equiv 1000 \text{ 圓}$$

$$1 \text{ commodity} = \frac{4}{5} \text{ coin} \equiv 1 \text{ 圓}$$

となる。鑄貨はこのとき800 coin \equiv 1000圓と呼ばれ、それは流通過程の中で1000 bullionの役割りを演じているのであるから、

$$800 \text{ coin} = 1000 \text{ bullion} = 1000 \text{ 圓}$$

$$\frac{4}{5} \text{ coin} = 1 \text{ bullion} = 1 \text{ 圓}$$

として流通の運動をたどる。鑄貨はその名目上から見ればまさしく $\frac{4}{5}$ coin = 1 圓としてその流通過程中に章標する 1 bullion = 1 圓を示し、また一般物價を見れば 1 commodity = 1 圓として、ちやうど (一) と同一の状況が回復されていることになるのである。

ラウンズはこうして鑄貨名目の引き上げにより 800 coin = 1000 圓とすることは、流通鑄貨の總額の増加 increase the whole Species in Tale を意味し、かくして不足をかこつ商業・取り引き・契約の支拂いに對してよりよく適合することになるとのべている (二一五ページ)。貨幣不足・デフレーションによる沈滞の状況を鑄貨名目の引き上げによって收拾しようとしたといえよう。すなわち (三) の状況における銀不足を鑄貨名目の引き上げによりその額面において不足を補いかくして (一) の状況にいたらしめることができるのである。

これに對してロックは名目の引き上げに反對し從來の規準をもって削損貨幣の改鑄が行わるべきことを主張す

ジョン・ロックの貨幣論 續

る。かれは當時の状況把握にさいして削損貨幣に注目し (五) の状況として把えていた。それに基いてかれの主張は (五) の状況を改鑄により (四) にひきもどそうというにある。かれの見解によれば、削損貨幣がなくなり新鑄貨は從來の milled money と同一のもので發行されるのであるから、當然退藏されたものもひき出されるであろう。かくして (三) の状況が回復されることになる。

右に見るように兩者の對策は削損貨幣の改鑄が必要であるという點では一致している。すなわち (五) の状況を (四) に回復せしむべきだということに相違はない。この (四) の状況から兩者の方向は別れる。ロックはその見解に基づき削損貨幣が從來の規準で改鑄されれば退藏鑄貨も流通にひき出され (三) の状況が生ずると主張する。ラウンズはこれに對し (四) の状況を (一) とくらべてみれば通貨不足の状態にある。このとき地金の交換價値は高い。前節で學んだごとく、かれはここからただちに地金と鑄貨との差別が生じ鑄貨は退藏されるか鑄つぶされてしまうと結論した。そこで (四) から (一)

への回復には鑄貨を地金と同じ『價格』に引き上げること、すなわち鑄貨名目の引き上げが必要とされると主張するのである。しかしロックがこの點でラウンズを批判しているように、(四)の状況においては地金と鑄貨との差別はない。その差別の原因たる削損貨幣がすでに解消されているからである。それゆえロックのいうように(五)↓(四)の回復は當然(三)の状況を生み出すであらう。

しからばロックは(三)における銀不足という状況をいかにして救うのであるか。ラウンズもロックもこの貨幣不足が物々交換あるいは信用 *barter or credit* を發生せしめるとしている(ラウンズ、二一五ページ。ロック、一四八・一七七―九ページ)。しかしそれは單に交易に必要な貨幣の不足を補う代用物にすぎない、と把握されている。このような『諸不便』(ロック、一七七ページ)は、ラウンズのいうごとく、鑄貨名目の引き上げによっては解決できない。なぜなら、一ヤード(二二二インチ)の布が目的に不十分なときに、一ヤード二一五インチとその規準を名目的に変えたからといって、從來の布が目的

に必要な長さになりえない、ということと同様だからである(一七七ページ)。この(三)という状況において必要なのは銀なのである(一七九ページ)。それゆえこれを解決するためには、貿易差額を順ならしめることにより銀地金をわが國にもちきたらす以外にはない(一五九―一六二ページ)。この銀の獲得によってのみ(三)から(一)への回復が行われるとするのである。ここでロックはすでに發表した論文におけると同じく、富は金銀に存しそれは貿易差額を順ならしめることによって獲得されるという基本的見解に立って、この銀不足という状況を解決しようとしているわけである。⁽¹⁾

(一) 前掲拙稿、第六節参照。

兩者の對策は相對比すると以上のごとくである。(五)を削損貨幣改鑄によつて(四)に回復させることにおいては兩者は一致している。ラウンズは状況把握の基礎を(三)の銀不足におき、銀地金價格の騰貴に注目した。それゆえ、鑄貨名目の引き上げによりこの不足している鑄貨をもつて、ちようど(一)の状況を回復しようとした。これに對してロックは削損貨幣の把握に見るごとく

鑄貨の價值はそれの中に含まれる銀地金に存するとし、(三)から(一)への回復は貿易による銀地金の獲得以外になく、鑄貨名目の引き上げは何らこの貨幣不足を補うるものではないとしてゐるのである。

六

一六九五年九月以後ロツクとラウンズの論争が行われたその年の末、議會は解散され、十一月二二日新議會が召集された⁽¹⁾。この議會は以前とは逆にウイッグ黨が多數をしめた⁽²⁾。王は召集の詔書中に改鑄問題にふれてその必要をとき、新委員會が作られて論議がたかかわされた。その結果ロツクの主張を根據にしたモンタギユの政府案が勝利し、従来と同一の規準による削損貨幣の改鑄が一六九六年初頭から實施されることとなった⁽³⁾。

(1) Cobbett: op. cit., pp. 958—963.

(2) Trevelyan, G. M.: England under the Stuarts. London [1904] 21 st. edition 1949. p. 382.

(3) Ruding: op. cit., p. 394—7. ラウンズとロツクの兩案をめぐる政治的・經濟的利害の對立については、本稿、第二節註(11)、拙稿、前掲、第四節、Cunningham, W.:

モン・ロツクの貨幣論 續

The growth of English industry and commerce in modern times. Part I. The mercantile system. Cambridge [1882] 5 th. edition 1912. p. 436, Note 4. Trevelyan: op. cit., pp. 381—2. Marx, K.: op. cit., s. 65. 邦譯、七六一七—七六二、Feareyear: op. cit., p. 128—9. 参照。

改鑄は一六九九年にやっと終り、新に鑄造された銀貨はやく六八一萬ポンド、政府の負擔した費用はやく二七〇萬ポンドの巨額にたつたと見られている⁽⁴⁾。この大改鑄はイングランドにおいて一二九九年以來はじめて従来通りの規準を維持して行われ、またその費用の大部分を政府負擔とした大改鑄であった。それゆえその後の改鑄問題のさいには(ことに一九世紀初頭の)つねに顧みられるものとなったといわれている⁽⁵⁾。

(4) Liverpool: op. cit., p. 85. 山下、前掲書、第一〇節、註四四(八三—四一七)。

(5) Feareyear: op. cit., p. 135, 137.

さて改鑄の實施に當り、削損貨幣の回收に比して新鑄貨の發行が間にあわず急速な貨幣不足となり、これにもない當時相當廣範に行われていた信用活動が收縮し

て、急激なデフレーションの状況となった。銀地金・一般商品の価格やかわせ料は下落した。⁽⁶⁾このことはいわばロックの目指した(三)の状況がまさしく展開されたことを意味するであろう。これに對してはイングリッド銀行券の増發およびモンタギューの發案による國庫證券 Exchequer Bill⁽⁷⁾の發行によつて收拾され、一六九七年はじめには通貨は順調をとりもどした。⁽⁸⁾

(6) Peaveyear: op. cit., pp. 132-4.

(7) 長谷田、前掲書、第三章。

(8) Peaveyear: ibid., p. 134.

このような事態は、ロックにとつて困難な問題、すなわち流通の過程の中では貨幣の不足はその交換價值を高め物價下落を生ぜしめるということに、いかに對處すべきかという問題が、現實の中で解決されていったことを示している。ラウンズはまさにこの點において鑄貨名目の引き上げを主張していたのであり、さらに改鑄方法を詳細に提示しているときには、削損貨幣と引き換えに證書 B^{III} を渡し、これを現金と同じく流通せしめて貨幣不足を補うという方法を教えている(二四九―二五四頁)

ジ)。これは必要通貨量という觀點に立っていたラウンズによつてはじめて提案できるものであり重要な指示であろう。そして前述一六九六年の國庫證券とはちよつどその内容を同じくしているのである。

それゆえこの状況を理論的に解くには、まず信用の作用について分析を進めなければなるまい。しかるに前節に見たごとくロックもラウンズも信用は單に貨幣不足を補う代用物にすぎず、それゆえロックによれば貿易による銀の獲得により、ラウンズによれば鑄貨名目の引き上げによる貨幣額の増加により、信用は不用になるものと考えている(ロック、一四八・一七七―一八二頁、ラウンズ、二一五―二一六頁)。このようないわば否定的理解をもつていたので、第三節に見たようなイングリッド銀行券の發行によるインフレーションの作用は、兩者とも積極的に理解できなかつたのである。

しかし事態はイングリッド銀行による巨額の發券、國庫證券の發行、および廣範な商業信用組織の展開を必要ならしめ、これによつて發展するイングリッド經濟社會の必要貨幣量が満たされてゆき、この大量の資金が新興

産業發展に資金を供給するという重要な役割を演じたのであった。もしラウンズやロックの把握をすすめて、信用の作用を通貨と関連せしめ、その紙幣としての作用を把えて理論的に理解するならば、當時の状況は第三節(八)として把えられ、ロックの主張は(八)における削損貨幣の改鑄により(七)(六)の状況の回復を目標としたといえるであろう。もし(六)の状況においてラウンズのごとき鑄貨名目引き上げが行われるとすれば、より激しい物價騰貴をひき起す危険があるであろう。事實はまさしくロックの主張のごとく、(八)↓(七)↓(六)という回復のプロセスをたどったと理解していいであろう。このように見るとロックの提案が一そう具體的・合理的なものとして現われてくるのではなからうか。

(6) Cunningham: op. cit., pp. 439-446. 大塚久雄『信用關係の展開』(河出書房刊『經濟學新大系』Ⅱ、資本主義の成立』第三章)一九五三年、参照。

以上のごとき改鑄實施のプロセスはさらに、通貨不足に對處すべき信用の作用——すなわち(六)の状況——は、その具體的内容として貨幣資本の流通過程であるこ

ジョン・ロックの貨幣論 續

とを教えている。この點についてロックはすでに貨幣流通のプロセスにおいて把えていた。要約すれば、借他農業家 farmer が労働者 labourer を雇ひ生産する。その生産物は自らの手であるいは仲介業者 broker 商人 merchant の手を通して國內・國外に賣りさばかれ、その代金により、労働者に勞賃 wage を地主 landlord に地代 rent を支拂ひ自らは利潤 profit をえる、借り入れ資金には利子 interest が支拂われる(一六、二四—七、三六七—七ページ)。さらにまたこの借地農業家は毛織物マニファクチュアを經營しているものも見られる(二〇ページ)。これに對していわゆる都市の織元 clothier や仲介業者、高利貸資本家たち bankers and scrivens は獨占等により借地農業家と對立するものとされる(二四—五、二八—三二ページ)。もちろんロックは、これらの状況を再生産の過程として把えてはいないし、またこの過程にそった信用の作用に分析をすすめていない。しかし現實の經濟社會の構造をこのように把握するならば、イングランド銀行券やその他の資本制商業信用組織がまたこの線上にそって流通をたどり、新興商工業促進に役立つものと理解

できるのではなからうか。

ラウンズが鑄貨名目の引き上げによって目指していた状況、ロツクが十分にそのプロセスの理論的分析をはたしえなかつた状況は、事實右のようにして著々實現されていったのである。かくしてロツクの貨幣把握の立場に立ちつつ、右の状況をさらに分析し精密化してゆく理論が要請されることになる。それは利子付き資本・信用制度の問題として私の勉強の課題となる。

七

ロツクとラウンズは改鑄問題について二つの異つた立場を代表しそれぞれ異つた対策を提示した。そしてそこにおける問題點が改鑄實施のプロセスの中でどのように解かれたのであろうかを、考察した。そこで次にこのような状況把握と対策を生み出した基礎にあるかれらの貨幣觀を對比して學ぶことにしよう。

ラウンズは當時の悪状況の原因を銀の不足に求め、それによって地金の價格が騰貴したと見る。そして新鑄貨はその『價格』を地金と同じく定めねばならぬとするの

である。すなわち(三)の状況の中で規定されている鑄貨の價値をそのまま認め、これを名目においても確定しようとする。それによって鑄貨價値が正しく規定できるとしているのである。このことは貨幣の價値が銀という金屬の價値から規定されるのではなく、流通の過程において定まるものと把握されていることを示している。すなわちラウンズは貨幣價値について數量説の觀點に立つて、かれの見解をうち立てているといえるであろう。

これに對してロツクは、貨幣の價値は銀という金屬自體に存し、その名目によるものではないという貨幣把握に立つている(一三九—一四一ページ)。名目は公共權威によつてその重量と純分を保證しているものなのである。

(一四一—二ページ)。それゆえ一圓という名目のもとに人は 1 coin = 1 bullion を受け取るべきなのである。この状況は(五)から(三)への回復によつてえられる。

しからば同じ 1 coin = 1 圓でも、(三)と(一)とでは異つた交換價値を示す。すなわち、

$$(三) \text{ では } 1 \text{ coin} = \frac{5}{4} \text{ commodity} = 1 \text{ 圓}$$

$$(一) \text{ では } 1 \text{ coin} = 1 \text{ commodity} = 1 \text{ 圓}$$

であった。この差異はどう解いたらよろしいのであろうか。ロックは右のような状況が、もしラウンズのいうごとく生じたと仮定しても、一ポンドの重さの銀は一ポンドの銀とはつねに相等しい価値をもつ、として自らの見解を貫いている。すなわち、たとえ他財に比しての交換価値が變動したからといって、一ポンドの重さの銀が五分の四ポンドの重さの銀に相等しいということはできない、とするのである(一六四—五ページ)。ロックはここで銀という金屬實體の価値を固持して、流通過程でのその運動の状況を十分に把握することができなかったといえるであろう。このような原理に立ってロックはその對策の目標を(三)の状況におき、ラウンズのいうごとく(三)の鑄貨を切り下げて(一)にいたらしめようとすることは、貨幣の価値に反するものとしたのである。

このように銀の金屬としての価値と通貨として章標する価値との関連の問題が、ロックにとって十分に理論的に明らかにされていないのであった。バーボン Barbon, Nicholas 1640?—1698 はこの矛盾をついている。すなわち、ロックは金や鉛等はその豊富・稀少に従ってその

ジョン・ロックの貨幣論 續

『價值』が變動するゆえに貨幣となりえないという。何故に銀は金・鉛等とは別のものとしなければならぬのか。ロック自らいうように銀もまた一商品であるから、その『價值』はその量の多少に従って高くまたは低くなるはずであろう。しからば銀を貨幣として商業の手段・尺度とし商品價值測定の尺度とはなしえないではないか。バーボンはこうロックを批判している⁽¹⁾。

(1) Barbon, N.: A discourse concerning coining the new money lighter. In answer to Mr. Lock's Consideration about raising the value of money. London 1696. p. 8—9.

ロックは前に發表した論文中に、右の二つの側面についてそれぞれ觸れているのであるけれども、これらがどのような関連において把握するべきかを明らかにして⁽²⁾ない。そしてこの改鑄論争の過程においては、金屬實體に存する価値を重視する立場を一貫して取っているのである。

(2) 私は前掲拙稿第六節において、ロックに學びながら、これら兩側面を一方は金屬としての貨幣商品の価値、他方はそれが流通過程において規定される価値として統一的に

一橋論叢 第三十二卷 第五號

把握しようと努めた。本稿第三節の(一)および(三)はそれを理論的に表現しようとしたのである。

しからは何故にロックはこのような觀點に立ったのであろうか。それにはかれの貨幣把握のより深い基底を求めねばならないであろう。ロックは、すでに『統治について』の二論文』の中で私有財産と貨幣の發生の問題を論じている。かれにとっては、貨幣(金・銀)は労働によって獲得せられた富・私有財産の抽象的な結晶體として把握されていたのではなからうか。⁽³⁾そして自然状態におけるこの私有財産・貨幣の保全が市民社會の任務となる。ここからして、貨幣はその金屬實體としての銀に對して人々がそれに同意によって與えた貨幣としての價值をもち、またそれを不變に保持すべきであるとする觀點がとられることになる(一三九—一四〇ページ)。それゆえ、削損によってその含む銀の量が失われるということもまた名目の引き上げによってより少い銀量を同一額と見なすことも、富の喪失を意味する。同一額には同一量の銀が意味さるべきなのである。

(1) Locke, J.: Two treatises of Government.....Lon-

don 1690. in "The works of John Locke. 12th edition. Vol. 4. London 1824." Book II. Chapter V. "Of property." § 45—50. 前掲拙稿、第六節、参照。

このように見れば、ロックの把握は、經濟社會の本質的内容に分析をすすめる歴史的・社會的な貨幣の規定を把握しようとしたものといえるであろう。ラウンズが現象の表面に發現している流通過程の中で貨幣價值を把握する限りでの態度に比して、ロックの態度は一そう深いものを教えている⁽¹⁾。私はここに貨幣數量説に對する批判の一基準を擧ぶことができると思う⁽³⁾。

(2) Ochenkowski, W.: John Locke als Nationalökonom. in "Jahrbücher für Nationalökonomie und Statistik. Bd. 34. Jena 1879." ss. 446—7.

(3) 前掲拙稿、第六節、参照。

ロックの分析とそれによる理論の體系は、すでに見たごとく、きわめて合理的に組み立てられている。これが現實的問題に對してあまりに抽象的であり、純粹の一般化とアプリアリの議論がこの改鑄という具體的問題においてかれを誤らせた⁽⁴⁾と批判されている。しかし右に見たごとくかれの論理の合理性こそが歴史的・社會的な經濟

構造の中で貨幣の本質を把握、さらにそれを基底としてこの改鑄問題を正しく分析し對策を立てることを可能ならしめたのではなからうか。ロックはこの改鑄問題についての自らの見解は『自然に』in nature 基礎をもち、『眞實』についての十分な確信』をもって語っているのだ、とのべているのである(一三四―五ページ)。ラウンズとの對比において、このような態度のロックがいかに合理的に具體的状況を把握その對策を立てたかをわれわれは學んできた。

(4) Shaw, W.M. A.: Select tracts and documents. iii.

ustrative of English monetary history 1626—1730.
London [1896] reprinted 1935. p. 103, 105.

しかしこの問題については、私有財産・貨幣の發生についてのロックの見解、かれの政治論・哲學におけるロックの態度と方法を一そう深く學びとることを要請している。それによって私は歴史的・具體的な經濟社會に相對處すべき態度と手法とを自らのものとして深めてゆきたいと思う。

(一九五四・八・二六)